

農学はもともと生物を利用した生産の基盤

農学生命科学研究科・農学部は本郷キャンパスの北側に位置する弥生キャンパスの中に存在する。この地には昔は一高があったが、昭和十年駒場にあった農学部とそっくり場所を交換し、現在の地に移ってきた。以前は、弥生キャンパスはすべてが農学部であったが、現在では地震研究所、分子細胞生物学研究所、文系学部の一部やその他の建物が建てられている。決して広くはないが、農学部の教育と研究の一部として重要な実験圃場や植物育成用のガラス室が残されており、この都会の真中で本郷キャンパスとは違つ心の安らぐ風景がまだ残っている。

昨今、クロトン動物、狂牛病、遺伝子組み換え作物、病原性大腸菌O157、輸入農水産物の薬品汚染など食品の安全性や生命観についての話題には事欠かない。また一方で、古くから医食同源という言葉があるように、食品が栄養以外にヒトの体を調節する機能をもつ「機能性食品」として注目を浴びている。

数年前に大学院が中心の組織に衣替、現在の名称に変更した。

教育・研究の現場から

大学院農学生命科学研究科・農学部

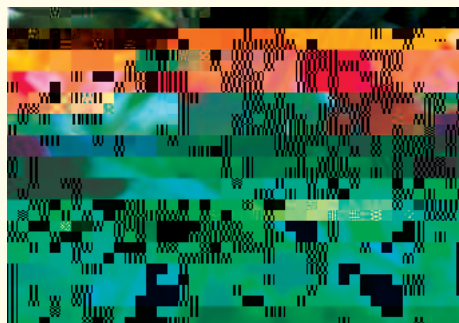
Graduate School of Agricultural and Life Sciences / Faculty of Agriculture

長澤 寛道

大学院農学生命科学研究科・農学部 教授

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html/>

農学生命科学研究科・農学部は本郷キャンパスの北側に位置する弥生キャンパスの中に存在する。この地には昔は一高があったが、昭和十年駒場にあった農学部とそっくり場所を交換し、現在の地に移ってきた。



を支える学問として発展してきた。農・林・水・かになら二名の留学生を受け入れており、アジアリつつある動植物や微生物の全ゲノム解析から諸国の教育研究のレベルアップにも貢献している。得られる膨大な情報をもとに新たな生命科学、本研究科の特徴の一つは、現場教育とフィールド研究のために全国各地に附属施設を有していることである。北海道富良野、千葉、秩父、富士、愛知に広大な面積の演習林をもっている。その他、農場、牧場、緑地実験所、水産実験所なども実習や研究に欠かせないものとなっている。

このような流れの中で、生命科学の教育研究の充実を目指して旧来の八専攻から新たに二つの専攻（応用生命化学専攻、応用動物科学専攻）が、また特にアジアにおける生物生産と環境の保全を目指した農学国際専攻、本研究科の中のフィールド科学を中心に専攻横断型の生圏システム学専攻が設置され、現在合計十二専攻からなる。農学国際専攻では大学院修士課程の院生は一定期間東南アジア諸国に向いて研究することが課せられている。また、この専攻を中心として副専攻制をとっており、もう一つ別の専攻で学習することも可能になっている。本研究科では、アジアを中心に一七

産業界とのつながりは単に卒業生を輩出するばかりでなく、食品分野で五年前から明治乳業株式会社による寄付講座が開設され、昨年はバイオマスの循環型利用を目指して生産技術研究所との共同で株式会社荏原製作所の寄付講座が新たに開設された。農学部正門のすぐ右手には一条工務店の寄付による総木造の弥生講堂が三年前に建てられた。約三万人を収容できるホールは学内、学外関係者に広く利用されている。「二十一世紀は農学の時代」といわれている。人口の増加による食糧不足や環境の悪化が懸念されているが、間近に迫っているこの世界的レベルの問題に対して農学への期待がますます高まっていることを思うと、農学で培われてきた知恵を大いに活用して、この35年へ

史料編さん所は、研日本史に関する史料の研究、編纂及び出版を行う研究所です。一八六九年の史料編輯事業開始から一三一年余、一九一年の維大日本史料、等発刊から百年余、古代から明治新期に至る国内外に残る各種史料を蒐集し、史料研究を通じて日本史研究の基幹史料集を編纂、出版しました。二一年には、史料集発刊百年を記念して東京国立博物館と共催の特展「時を超えて語るもの」、史料集編纂国際シンジウム「歴史学と史料研究」、東京大学史料編纂所史料集、刊行を行いました。

史料の研究と編纂の基礎は史料の調査・蒐集です。三年以上にわたり、全国の史料の複本を蒐集しました。また、二一年に国宝に指定された島津家文書など、貴重な史料原本も多数所蔵しています。そして、『大日本史料』、『大日本古文書』、『大日本古記録』、『大日本近世史料』、『大日本維新史料』、『日本関係海外史料』、『幕末外国関係文書』、『花押かがみ』、『日本荘園絵図聚影』、『正倉院文書目録』など、約一千冊の史料集を刊行しました。

史科学

大源院人文社会系研究科日本文化研究専攻・文化資専攻で史科学の教育を行い、大学院

三條西実隆像紙形
レオナルド・ダ・ヴィンチのデッサン三條西実
(1455 - 1537) が 1501 年に絵師土佐光信に描か
もの。実隆は室町後期の公卿、当代一流の文人。謙貞「日記「実隆公記」(重要文化財)と共に本所所蔵

情報環の歴史情報にも教官を派遣しています。様々な大学から日本学術振興会特別研究員や国内研究員を受け入れ、若手研究者の養成と学術資源の共有・研究を進めています。欧・アジア諸の研究者、大学院学生を外人研究員として多迎入れています。また、様々な国際研究集会を開催しています。

附属「画像史料解析センター」では、肖像画・絵巻物・荘園絵図などの絵画史料、錦絵・古写真などの画像史料の蒐集・分析を進め、歴史学における新分野の研究に取り組んでいます。一六世紀以来のヨーロッパ諸の東アジア進出、鎖と開国などの歴史を明かにして世界史の中に日本を位置付けるため、一九世紀末以来、欧米諸の日本関係史料の調査・蒐集を行ってきました。近年は、東アジア諸やロシアの関わりとの交流を深め、これらの国々の前近代日本関係史料の調査・蒐集に取り組んでいます。二一年には、大韓民国の國史編纂委員会と学術交流協定を締結しました。影史料保技術室で、伝世的・創的な史料写真撮・絵画模写・文書写と史料の修補修復の技術により、貴重な文化産を保し、研究に利用するための仕事を進めています。このような組織は全国でも珍しいものです。

『南島雑話』(国宝島津家文書あつち
19世紀前葉頃の奄美大島の情景

大量の史料・史料集の高度利用のために歴史情報研究を推進し、多数のデータベースを公開しています。データは画像フェイ